

は純資産の前期末残高(当期首残高)に当期の増減を加減算して当期末残高を示した書類である。よって、連結株主資本等変動計算書を作成するためには、純資産項目については前期末残高を当期首残高としてすべて引き継ぐ必要がある。

つまり、開始仕訳として引き継ぐ対象となるのは、純資産項目が絡んでいる仕訳ということである。開始仕訳の目的は、純資産の期首残高を前期末と一致させるためと認識しておこう。結果として、純資産項目が関係する連結仕訳については、必ず「開始仕訳」として当期に仕訳を引き継ぐ必要があり、引き継ぐ際には残高として引き継ぐのではなく、当期

首残高として引き継ぐことに留意する。

説明が長くなったが、前述のとおり開始仕訳についてもまずは形から覚えておこう。純資産項目を含む連結仕訳については、すべて開始仕訳として引き継ぎ、その際、純資産項目は開始仕訳においては「期首残高」として引き継ぐ。相手科目は貸借対照表項目であればそのまま、損益計算書項目であれば、「利益剰余金期首残高」として引き継ぐ。形式的に作業することで開始仕訳を作成することができるので、まずは形から覚え、繰り返し作業をすることで徐々に理解を深めていくのがよいであろう(設例2)。

(設例2) 開始仕訳

(簡単な数値例)
 前前期首：親会社800出資、外部者200出資、子会社資本金1,000
 前期：子会社の当期純利益500、子会社の支払配当200(親会社への配当160、外部者への配当40)
 当期：子会社の当期純利益800、子会社の支払配当300(親会社への配当240、外部者への配当60)

(連結仕訳)

■前期の仕訳■

投資と資本の消去

資本金	1,000	／	子会社株式	800
			非支配株主持分	200

当期純利益の按分

非支配株主に帰属する当期純利益	100	／	非支配株主持分	100
-----------------	-----	---	---------	-----

配当金の消去と振替

受取配当金	160	／	利益剰余金(支払配当)	160
非支配株主持分	40	／	利益剰余金(支払配当)	40

■当期の仕訳■

1. 開始仕訳

投資と資本の消去

資本金期首残高	1,000	／	子会社株式	800
			非支配株主持分期首残高	200

当期純利益の按分

利益剰余金期首残高	100	／	非支配株主持分期首残高	100
-----------	-----	---	-------------	-----

配当金の消去と振替

利益剰余金期首残高	160	／	利益剰余金期首残高	160
非支配株主持分期首残高	40	／	利益剰余金期首残高	40

2. 当期仕訳

当期純利益の按分

非支配株主に帰属する当期純利益	160	／	非支配株主持分	160
-----------------	-----	---	---------	-----

配当金の消去と振替

受取配当金	240	／	利益剰余金(支払配当)	240
非支配株主持分	60	／	利益剰余金(支払配当)	60

第4章

属人化を防ぎ、システムを使いこなす 連結決算業務を 見直すためのポイント

属人化を防ぎ、システムを使いこなす

【この章のエッセンス】

●連結決算に携わる人材が育たないのは、現状の連結決算業務が属人

化していることが原因かもしれない。

よって、連結決算に関する基礎知識をつけるとともに、現状の連結決算業務の見直しも行っておこ

う。

●また、連結会計システムを利用している会社の担当者は、連結決算の知識だけでなく、連結会計シス

テムに対する知識も習得する必要がある。

属人化は「悪」、「自分
にしかできない」を
減らす

連結決算ができる人材が育たないという声をよく耳にするが、実は、現状の連結決算業務が属人化してい